

よみがえれ！ 海岸林

東日本大震災復興支援「海岸林再生プロジェクト10ヵ年計画」を、元日経新聞論説委員の小林省太がさまざまな角度でお伝えます。

Vol.5



海岸林再生を目指すオイスカの人々が、東日本大震災発生から2ヵ月半後、2011年5月下旬に宮城県を訪れた。現地の海岸を回って被災の様子を調べ、オイスカの考え方の大枠を名取の人々にはじめて説明するのが目的だった。プロジェクトと名取の「出会い」である。

根が地中深く伸びず津波に倒されたクロマツの太木。左は横から撮影したもの(宮城県東松島市、2011年5月26日撮影)

2011年3月11日の震災からほぼ3ヵ月に及んだ避難所での生活も、終わりが近づいていた。しかし、たとえば支援物資の衣料が届くと、こんどはそれをしまうためのバッグ一つがない。まだそうした問題が日々被災者を悩ませている状況だったと、宮城県名取市議の小野泰弘さん(58/年齢は現在、以下同じ)はいま振り返る。避難所を後にする人が増え、残った人々の焦燥は募った。

は各地区の役員ら12人ほど。小野市議はまだ当選前で、県議への転身を目指していた当時の地元選出市議の後継者として会合に加わったが、やはりオイスカについて何も知らなかった。

オイスカの計画は「地元の人々と一緒に震災で失われた松林を再生したいので協力してほしい。費用はすべて寄附で集め、苗木づくりは被災農家に仕事としてやっていただく」というものだ。吉田俊通・現海岸林担当部長(49)は、海岸林再生が各地で本格化すればクロマツの苗木が圧倒的に足りなくなることですぐに把握していた。

5月24日午後2時。名取市立第二中学校体育館。津波に流された海岸林の近くにあった北釜集落出身で千葉県に住むAさんが間に入って場をつくった。オイスカ側からは8人が出席した。プロジェクトを名取でやると決まったのではなく、オイスカの基本的な考えを知ってもらおう趣旨である。

迎える被災者の側にオイスカに関する知識はゼロだった。テーブルに着いたの

しかし、多くの被災者にとって、今日明日をどう生きるかということからは遠い話でもあった。突然聞いたこともない団体がやってきて「やりましょう」という。背景も実績も規模も、国や県、市との関係も分からない。寄附はちゃんと集まるのか。仕事といっても生活できるだけの金がもらえるのか。分からないことづくめである。

被災地にさまざまなバラ色の話が持ち込まれた時期でも



避難所になった中学校の体育館でプロジェクトの説明をするオイスカのチーム(宮城県名取市、2011年5月24日)

あった。ハリケーンの被害に遭った米ミシシッピ州の例にならって、仙台空港を核に「復興カジノ」をつくろうという構想が出始めたのもこのころだ。「大型施設で働けばいいお金になる」。そう考える人も少なくなかったという。

避難所には海岸から離れた地区に住んでいた人もいる。お金がからめば、まわりの目まわりの耳が気になって大声も出せない。それやこれやで、

会合はオイスカにとって厳しい雰囲気なかで始まった。

「いっしょに、どこのやしらだ」

当時は宮城中央森林組合の職員で今は林業会社「松島森林総合」を営む佐々木勝義さん(61)は、学校での森づくり活動などを通じて震災前から吉田さんと付き合いがあった。かつて名取で植林したこ

とがあり、海岸林の働きや成り立ちにも詳しい。いままプロジェクトには欠かせぬ人物である。吉田さんに請われ、専門家として避難所に出かけた。ただ、宮城県でも名取より北にある松島町に住んでいて、地元には知り合いはいない。「無我夢中で、宮城県の林業のプロとしてオイスカの計画に協力すると伝えました。よく聞いてはくれたんですが、最初は『なんだ、こいつらどこのやつらだ』というすごい顔でにらまれた。殺気すら感じました。雰囲気はだんだん和らいできて、一人二人、最後まで厳しい顔のままの人はいましたね。もちろん心情的には理解できましたけれど」

「富士山の森づくり」をきっかけにオイスカに加わり、国内外のプロジェクトで技術的なアドバイスをしている山梨県森林総合研究所出身の清藤城宏さん(73)もチームの一員だった。「行ったのは避難所そのものです。そうした経験は初めてです。みなさんから『あいつら何しに来たんだ』ってという目で見られましたよ。それをすごく感じちゃいましたね」

大阪成蹊大学講師の菅文彦さん(49)はオイスカに勤めた後、震災当時は街づくりや地域活性化を目指す非営利組織(NPO)向けのコンサルティンクの仕事をしていた。吉田さんからプロジェクトについて相談を受け、「行ける」「やるべきだ」と直感的に思った。その後はホームページづくりや寄附集め、シンポジウムのコーディネートなどでプロジェクトを支援していくことになる人だ。

「メディア、救援物資を持ってこくる人、政治家、山っ気たっぷりの人。避難所にはいろんな人が毎日来る。『また変な連中が……』と思われて当然です。アウェイで信用される要素はない。でも、そういったところに無神経で乗り込んでいるのがオイスカのいいところでもある。間違ったことしているわけではないです。ただ、時間はかかると思った」

「あてにされることに飢えていた」

総じて意気上がらぬチームの中で、鈍感なのだろうか、吉田さんだけは違った受け止め方をしていた。「被災者をボランティアとして使うのか」「違います、お金を払います。『いくらか』」「それはまだ言えません。『全体の予算は?』」「それもこれからです。数千万円でも1億、2億でもなく、もっとかかると思う。小野市議らとのやり取りを通じて、前向きな感触を得ていく。

この日を機に名取でプロジェクトが動き出すことになるのだから、結果的に訪問は「成功」したことになる。「そりゃ国がするんじゃないのか」「だまされて二重に被災するのはたまらん」。そんな意見が大勢のなか、野菜づくりのノウハウを生かしてクロマツの苗木づくりができることに惹かれた農家の人が何人かいた。いま、「あの時は、あてにされることに飢えていた。頼まれれば喜んでやるという気持ちでした」と被災農家の高梨仁さ

ん(69)は話している。

一時間ほどで体育館を去るとき、吉田さん一人「もう名取得決まったな。ほかを探す必要はない」と確信、好天の青空を仰いで自然笑みがこぼれたのだという。

避難所では、「よかつたら」と言われて被災者を夜の宴席に誘った。場所はAさんの中学の同級生が営む居酒屋。被災者8人が手を挙げたというが、夕方、実際に現れたのは3人。料理が大量に余った。しかし「3人しか来なかった」のか、「3人来てくれた」のか、も

は考えようである。3人は高梨さん、Aさんと居酒屋の主人と同級生だった森清さん(64)。それに地域のまとめ役で、中学教師の時代はAさんと森さんの恩師でもあった鈴木英二さん(77)。当時は「名取市東部震災復興の会」の会長で、オイスカへの協力を地元として決断した中心人物である。鈴木さんは居酒屋に「ふるさと北釜物語」など、古い住民がつくった郷土史の冊子を二種類持ってきた。松林を再生してかつての故郷を取り戻したい」という願いがオイスカの人々に伝わ

小さな砂丘がマツを救った

り、吉田さんの「ここで行ける」との気持ちも強まった。小野市議は会合の後、住民たちの要望も踏まえてインターネットなどでオイスカについて調べた。宗教団体が母体であることを知り、「NGOとして国際協力分野を中心に宗教色のない仕事をきちんとしている」ことも分かった。上京してオイスカの本部に泊まり込み、オイスカの雰囲気を感じるのは7月半ばのことである。

二泊三日の出張のおもな目的の一つに現地調査があった。沿岸を回って海岸林の被災状況を細かくチェックすると、目についたのは、円盤のような浅い根のかたまりをさらすようにひっくり返っているクロマツの姿だ。クロマツの根は本来地中深く伸びてがっちり幹を支えるといわれていたのに、である。ちよどそのころ、内陸部を守るはずの海岸のクロマツが津波で倒れ、津波にのって住宅や農地を襲う凶器になっ

た、という面がクローズアップされていた。言ってみれば「クロマツ悪者論」である。

たとえば宮脇昭・横浜国立大名誉教授は「深根性、直根性の広葉樹に比べてマツの根は浅い」と主張。希望の象徴として話題になっていた岩手県・高田松原の「奇跡の一本松」についても、「一本のマツだけが残ってあと(の7万本)が全滅しているというのは(中略)、マツだけでは防潮林として無理があるということの証ではないでしょうか」と訴えた(著書「森の長城」が日本を救う)より。宮脇氏は常緑広葉樹を主体にした海岸林づくりを呼びかけ、「宮脇方式」といわれるその考えは震災後の林野庁や各自治体の施策にも影響を与えていた。

一方では、海に面した最前線の乾燥や貧栄養、潮風などの厳しい環境に耐えられるのはマツしかないことは各地の長年の経験が証明している。「宮脇方式」はコストがかかりすぎる、といった意見も、行政や専門家の間に強かった。流木による二次被害の半面、残った松林が津波のエネルギーを弱めたり船や車、コンク

リートブロックなどの漂流物をからめとったりして被害を減らす効果があったことも報告されていた。直前の5月21日には、震災後の方針づくりを目指して国がつくった「海岸防災林再生に関する検討会」の第一回会合が開かれた。オイスカの現地調査はそんな時期に行われたのである。

調査の詳しい報告をまとめたのは清藤さんである。報告は地形、木々の間隔などによって被害のパターンが異なることを指摘した。具体的には、海水面と変わらない「海抜ゼロメートル」の地点では深根性のはずなのに根が下に伸びていないこと、木々の間隔が狭いところでは根が横にも広がっていないことを、マツが倒れた理由として挙げた。他方、高さ1mほどの砂丘などわずかな地形の違いで、多くのマツが立って残っていることも分かった。そうした実態から、密度を減らしたり盛土の上に植えたりすることが必要だと報告では訴えた。

「私も広葉樹を海岸に植えた歴史を調べましたが、いまも広葉樹が残っている例は

文献でも実際にもほとんど見ないことにはありません。海岸の松林にはサクラなどの広葉樹ももちろん生えてきます。でも、まずは海岸の最前線にクロマツで、防波堤をつくらなくと広葉樹は育ちません」というのが清藤さんの考えであり、オイスカのチーム全体の考えでもあった。

出張中には林野庁仙台森林管理署や宮城県、県農林種苗農業協同組合の関係者らとも会っている。清藤さんが国際協力機構(JICA)からインドネシアに派遣されていたとき、林野庁から同国に出たのが嶋崎省仙台森林管理署長で、2人は現地で見知りだった。そんな奇縁は分かっていたが、プロジェクト自体まだ漠としていた。とりあえずの顔合わせだった。

海岸林再生は国や県の担当者にとって大切な課題の一つだったが、ほかに仕事はいくらでもあった。たとえば震災後の寒い時期は灯油や練炭、まきなど燃料の確保や供給、そのあとは避難所や仮設住宅に必要な木材の供給、打撃を受けた木材加工業立て直しの支援、山崩れの対策などであ



砂丘のマツは残った(岩沼市、5月25日)

る。オイスカが早々と手を挙げてくれたのはありがたいが、どの程度任せていいものか。担当者はそんな期待と不安のなかにあったようである。

プロジェクトが大規模になれば既存業者との関係を行政は気にする。「公共事業では新規参入に対して反発がある」(林野庁関係者)からである。苗木の生産についても宮城県の担当者は既存業者との関係を心配した。

「県に十数あった苗木生産者は、スキの苗の需要が落ち込んで苦しい状況だった。その人たちにまずマツの苗木づくりをがんばってほしいというのが、基本的な立場でした」と、宮城県森林整備課で種苗生産を担当していた源後睦美さん(38)は言う。生産者団

体の種苗組合も当初は「新規参入は困る」という立場で、組合長との初顔合わせについて「新規参入者に対しては懐疑的だった」と清藤さんは報告に記している。

前述したように、オイスカには苗木が圧倒的に不足するという確信があった。一方で、県や組合の側には当初、オイスカが苗木づくりを安易に考えているのではないかと懸念もあったようだ。被災農家の人々が、生まれ育った地域を再生するために使う苗木をつくるという考えが理解され、種苗組合への加盟と進むのはもう少しあと。2016年以降は、この苗木の出来栄が評価され、宮城県や国のコンクールで表彰されることになる。

出張の日程をほぼ終えた一行は、5月26日、ある人物を訪ねた。松島町に住むその人はステテコ姿で現れ、みんなに缶コーヒを配った。佐々木廣一さん(68)。このプロジェクト全体を担う扇の要の立場に就く人とオイスカとのはじめの出会いはある。思えば実りの多い二泊三日だった。



左/根が張っていないクロマツが地面ごと向こう側に倒れている(名取市、2011年5月25日) 右/根は無事だったが幹が根もと近くから折れたクロマツ(宮城県岩沼市、同日)



☆次回は6月号に名取市の関上地区について書く予定です。

公益財団法人 オイスカ E-mail: kaiganrin@oisca.org
http://www.oisca.org/kaiganrin/
プロジェクトへのご支援・ご協力お願いします!
郵便局から(お名前・ご住所・電話番号などを払込取扱票に明記してください)
口座記号・番号 00100-6-482316
加入者名 海岸林再生募金
銀行から(お名前・ご住所・電話番号などは別途下記にお知らせください)
銀行名 三菱UFJ銀行 永福町支店(支店番号347)
口座 普通 0054080
名義 公益財団法人オイスカ(コウエキザイダンホウジンオイスカ)